大学生における死の意識に関する調査

増田公男
(金城学院大学人間科学部)
キーワード:死の意識、死別経験、女子大学生

A study on consciousness about the death in female university student
Kimio Masuda
(College of Human Sciences, Kinjo Gakuin University)
key words:consciousness of death, bereavement experience, female university student

【目 的】

わが国では、人口構成の高齢化や年間3万人を超える自殺者といった社会的課題を背景として、人びとは生や死を意識せざるを得ない状況にあるといえよう。本研究では質問紙による調査法を用い、青年期女子の死に関する意識が、それまでの死別経験によって影響を受けているのではないかと仮定に基づき、検討することをおもな目的とした。

【方 法】

調査年月及び協力者 一 本質問紙調査は、2009年7月に女子大学生1、2年生に対して実施し、196名から回答を得た。今回の分析対象は、一部未記入者を除いた191名であった。なお、平均年齢は18.7歳(SD=0.66)であった。
質問紙 一 本調査で使用した質問紙への回答は、無記名式で実施した。25項目(各4件法)からなる「死に関する意識」についての質問(田中、2001)を中心に、属性の他、居住状況、死についての意識の経験の有無とその発達段階と内容、死別経験、死のイメージなどの記入を求めた。死を意識した内容とイメージは自由記述方式とした。なお、今回の統計的分析は、おもに「死に関する意識」について行った。

【結果と考察】

今回用いた田中(2001)の質問紙で調査対象としたのは、青年期、壮年期、老年期と幅広く、男性も含まれているため因子構造が異なる可能性があるため、因子分析(SMC法、プロマックス回転)を試みた。2因子から6因子まで実施したところ、3因子で最適解を得た。もとの分析結果は5因子であり、2因子少なくなっており、因子構造が異なるようであった。個別に比較すると、第1、第2因子ともに9項目になり、それぞれ因子に前者で1項目、後者で2項目加わったことになり、残りは共通であった。大きな差異があったのはここでの第3因子で、3項目になり第3から第5因子に属した項目で構成されていた。なお、各因子で因子負荷量が3を下回った4項目は除いた。第1因子はもとの名称と同じく「死を考える」因子、第2因子はこれも同様に「死の不安・恐怖」の因子とした。もとの研究とは異なる項目からなる第3因子は、「死後に関係した事柄」の因子と考えられる。

死の普遍性、体の機能の停止、非可逆性といった死の特性は、児童期のうちに理解されるという先行研究(仲村、1994など)にもとづき、「全体」と各因子について児童期までの身近な人やかわいがっていた動物との死別経験が、これらの意識と関係があるのではないかと予測し、それぞれについて検討した。前者では統計的な差異は確認されなかったが、後者(以下、「動物との死別経験」；死別経験ありー80名/41.9%、死別経験なしー111名/58.1%)においては、「全体」では有意な差異が確認され(t=1.83,df=189,p<.05；以下自由度はすべて同じ)、「死を考える」と「死の不安・恐怖」では有意な傾向が認められた(順にt=1.47,p<.10、t=1.33,p<.10)。このように動物との死別経験が、死の意識に関係していることが確認された。

また、今回分析に用いた21項目について、動物との死別経験の有

無と評定段階による χ^2 検定を実施したところ、3項目で有意差が、4項目で有意な傾向が認められた。表2には、有意差が認められた項目の回答分布と平均値を掲載した。

身近な人との死別では死の意識に影響は認められず、動物との死別経験では認められたという結果については、以下の点に留意する必要がある。つまり、前者の経験者のうち具体的記述のあった49名(61.3%)中87.8%までが、祖父母(ないしは曾祖父母)であったが、今回の調査では、当時同居していたか否かについては質問項目に含めていなかったため、それ以上の分析ができなかった。そのため、結果は限定的理解に留める必要がある。動物の場合、「かわいがっていた動物」という条件のもとに回答を求めたため、自分自身がおもに世話をしていた可能性が高い。それゆえ親近感が強く、そのため死別後の悲嘆の程度が強く、回復までの一連の過程を経験したことにより、「死の意識」への影響を示唆する結果につながったのかもしれない。

表1 児童期までの動物との死別経験の有無による「死に関する意識」の全体及び3下位領域の平均得点と標準偏差

「全 体」	平均得点	標準偏差
あ り	54.7	8.89
な し	52.3	8.48
「死を考える」	平均得点	標準偏差
あ り	23.2	5.47
な し	21.9	6.24
「死の不安・恐怖」	平均得点	標準偏差
あ り	21.4	5.10
な し	20.4	4.24
「死後に関係した事柄」	平均得点	標準偏差
あ り	10.1	1.46
な し	10.0	1.52

表2 児童期までの動物との死別経験の有無により有意差が認められた項目(χ^2 検定)の回答分布(%)と平均値

(3)私は寝る前に死について考えることがある<死を考える因子>					
	←弱い	1	2	3	4 強い→
あ り [2.08]	30.0	41.3	20.0	8.8	
な し [1.82]	46.8	31.5	14.4	7.2	
(5)私が死んだとき、身内の人がどう振るまい、どう感じるかを考える とがある<死の不安・恐怖因子>					
	←弱い	1	2	3	4 強い→
あ り [2.88]	7.5	17.5	55.0	36.9	
な し [2.64]	14.4	27.9	20.0	20.7	
(10)私は死ぬことはほとんど気にしない(逆転項目、逆転後の表示) <死の不安・恐怖因子>					
	←弱い	1	2	3	4 強い→
あ り [2.99]	7.5	22.5	33.8	36.3	
な し [2.78]	9.0	27.9	39.6	23.4	

()内数字は質問番号／[]内数字は平均値